

# 主婦の衣生活に関する考察

—被服構成について— (第1報)

## A Discussion about the Dressing Life of the Housewives.

—On the make-up of the dress.— (Part 1)

本間小枝子

Saeko Homma

Because of their technique and their sense of beauty about the dress, the housewives can save money more easily by careful planning for the dress of their families than those for food or for dwelling. Therefore this part in the livelihood is important in these times when the saving is necessary. Considering these situations and searching for the way of improvement of the home life, we pursued investigations about (1) the make-up of the dress, (2) the state of using the dress and (3) the state of buying the dress. In this report, the result about (1) is discussed.

For the investigations, we first selected a set of questionnaires, and then distributed them to 400 households of workers living in Tokyo. They were pursued from July 1 to July 10 in 1974. The following discussions were made examining the 309 replies (about 77%).

As for the make-up of the dress, those who have more experience about the make-up excel in the make-up than those who have less, and the older excel the younger. Many housewives consider that clothes of their own making are good because of the economy, and also that it is desirable to make their own everyday clothes.

In consequence, it is necessary to improve the technique of make-up of the dress, because of their higher necessity in the livelihood.

### I 緒言

現代は物価上昇で節約ムードの高まっている折から、家庭生活における衣・食・住のうち意外

と節約しやすいものは被服費であり、しかもそれは主婦のもつ美意識や技術の果す役割が大きいものと思う。そこで主婦の衣生活に対する現状を認識し、より豊かな家庭生活を営むために、(1) 被服構成 (2) 衣服の着用状態 (3) 被服の購入状態について調査を行なった。

今回はそのうちの被服構成について報告する。被服構成について昔の主婦の多くは、家庭で被服構成をするのがたてまえてあり、また、その技術を身につけようと心がけたものである。しかし、機械技術の発達した今日では、オートメーション化による大量生産が行なわれ、被服面にも便利な既製服の時代がおとずれた。このような社会情勢における主婦の被服構成に対する経験度やその必要性について検討を試みた。

## II 調査方法

調査は質問紙を作製し、その対象は、東京部内の勤労者世帯をえらんだ。(総理府統計局家計調査の職業分類による。)

時期は昭和49年7月1日から10日間とし、400世帯に配布した。回収の結果、不備なものをのぞいて309世帯(回答率、約77%)について考察した。

## III 結果と考察

### 1 家族構成

家族構成は第1表のとおりである。夫婦を単位とする核家族が全体の約93%で、そのうち夫婦と子供を単位とするものが約73%と最も多く、核大家族は約7%と少なかった。これは現代家族構成の特徴を示している。

平均家族数は核家族では3.7人、核大家族では5.2人で、全体の平均家族数は3.8人であった。

これは総理府統計局「家計調査報告による人口5万以上の都市勤労者世帯昭和49年7月の世帯人員3.8人」と同じである。

### 2 被服構成経験の有無と過程

被服構成の経験のある人は約89%で、経験のない人は約11%であった。そして、経験のある人は第2表のように、正規の学校教育、各種学校、個人指導、その他(通信教育、独学)によって習得しており、学校教育(26.3%)、各種学校(22.7%)、個人指導(19.1%)の順である。

1ヶ所のみで習得した人は68.1%と最も多く、学校教育と各種学校というように2ヶ所で学んだ人は14.8%、3ヶ所の人は1.6%と非常に少なかった。

第1表 家族構成

家族構成		世帯	割合	$\bar{x}$
核家族	夫 婦	45	14.6%	人 3.7
	夫 婦 と 子 と も	226	73.1	
	そ の 他	15	4.9	
	計	286	92.6	
核大家族	父母・夫婦・子ども	12	3.9	5.2
	母・夫婦・子ども	6	1.9	
	母 ・ 夫 婦	2	0.6	
	そ の 他	3	1.0	
	計	23	7.4	
合 計		309	100	3.8

$\bar{x}$  平均家族数

た。

20代では学校教育，30・40代では各種学校，50代では個人指導による習得が最も多く，また，年齢が多くなるにしたがって経験の比率も高くなり，40代では平均を上まわっていた。

第2表 被服構成経験の有無と過程

種類	年代	20代	30代	40代	50代	計	
一 種	学校教育	19人(34.6%)	22人(24.8%)	32人(26.9%)	8人(17.4%)	81人(26.3%)	%
	各種学校	4 ( 7.3 )	23 ( 25.9 )	39 ( 32.9 )	4 ( 8.7 )	70 ( 22.7 )	
	個人指導	14 ( 25.5 )	11 ( 12.4 )	20 ( 16.8 )	14 ( 30.5 )	59 ( 19.1 )	
二 種	学校教育と各種学校	1 ( 1.8 )	5 ( 5.6 )	7 ( 5.9 )	2 ( 4.3 )	15 ( 4.8 )	14.8
	学校教育と個人指導	2 ( 3.6 )	2 ( 2.2 )	3 ( 2.5 )	2 ( 4.3 )	9 ( 2.9 )	
	各種学校と個人指導	1 ( 1.8 )	5 ( 5.6 )	8 ( 6.7 )	8 ( 17.4 )	22 ( 7.1 )	
三 種	学校・各種・個人	1 ( 1.8 )	2 ( 2.2 )	1 ( 0.8 )	1 ( 2.2 )	5 ( 1.6 )	1.6
そ の 他		1 ( 1.8 )	6 ( 6.7 )	6 ( 5.0 )	2 ( 4.3 )	15 ( 4.8 )	4.8
	計	43 ( 78.2 )	76 ( 85.4 )	116 ( 97.5 )	41 ( 89.1 )	276人(89.3%)	
ない	計	12 ( 21.8 )	13 ( 14.6 )	3 ( 2.5 )	5 ( 10.9 )	33 ( 10.7 )	
合 計		55 ( 100 )	89 ( 100 )	119 ( 100 )	46 ( 100 )	309 ( 100 )	

### 3. 被服構成経験者の結果

被服構成経験者の結果は第3表のとおりであった。

第3表 被服構成経験者の結果

種類	年代	20代	30代	40代	50代	計
で き る	和裁のみ	3人( 6.9%)	5人( 6.6%)	9人( 7.8%)	5人(12.2%)	22人( 8.0%)
	洋裁のみ	19 ( 44.2 )	30 ( 39.5 )	16 ( 13.8 )	3 ( 7.3 )	68 ( 24.6 )
	和・洋裁とも	19 ( 44.2 )	39 ( 51.3 )	88 ( 75.8 )	33 ( 80.5 )	179 ( 64.9 )
	計	41 ( 95.3 )	74 ( 97.4 )	113 ( 97.4 )	41 ( 100 )	269 ( 97.5 )
できない	計	2 ( 4.7 )	2 ( 2.6 )	3 ( 2.6 )	—	7 ( 2.5 )
合 計		43 ( 100 )	76 ( 100 )	116 ( 100 )	41 ( 100 )	276 ( 100 )

被服構成経験者で構成できる人は97.5%で，経験はしたけれども構成できない人が2.5%であった。そして，年齢の伸びにしたがって構成できる割合も高くなっている。また各年代ともに和・洋裁両方できる人が64.9%と最も多く，若い人は洋裁を年配者になるにしたがって和裁を得意とする傾向がみられる。

次に被服構成の経験はしたけれども構成できないと答えた7人について調べると，7人のうち5人は学校教育による人であり，2人はその他で習得した人であった。これらの点から本人の意欲もあるであろうが，学校教育の指導にも考慮を要する点があるのではなかろうか。また，経験をしない人は被服構成ができないと答えた人が多いが，それは当然のことであろう。もしも被服構成ができるようになりたいと思うならば，やはり学ぶ必要があるだろう。

#### 4 被服構成経験者の和・洋裁のでき得る程度

被服構成経験者の中で和裁および洋裁に分けてそのでき得る程度をしらべると第4表のとおりであった。

##### 和裁の場合

「ゆかた」程度は全員縫えるが、「あわせ」ものになると約54%であった。「ひとえ長着・羽織」以下10種類の広範囲にわたってみると、年齢が多くなるにしたがって構成でき得る比率も高くなり、なかでも40代が最もすぐれており、現代では珍しい「はかま」まで心得ている人もいた。これは被服構成経験の比率にも現われているように、経験の必要性が高く評価されてよいと思う。

##### 洋裁の場合

ふたん着程度の「ブラウス・スカート・ワンピース」は全員縫えるが、裏つきの「スーツ・コート類」になると約21%、「子供服」は約11%と少なくなっている。しかし、裏つきの「スーツ・コート類」では40代、「子供服」では30代が構成でき得る比率が高い。これは生活の必要上おのずから生じたものであろうか。

第4表 被服構成経験者の和・洋裁のでき得る程度

回答数と割合		年代	20代	30代	40代	50代	計
程度			22人(100%)	44人(100%)	97人(100%)	38人(100%)	201人(100%)
和	ひとえ	ゆかた	22 (100)	44 (100)	97 (100)	38 (100)	201 (100)
		長着・羽織	7 (31.8)	18 (40.9)	68 (70.1)	26 (68.4)	119 (59.2)
	あわせ	長着・羽織	4 (18.2)	10 (22.7)	68 (70.1)	26 (68.4)	108 (53.7)
		綿も入れの		1 (2.3)	23 (23.7)	7 (18.4)	31 (15.4)
		丹前		1 (2.3)	1 (1.0)		2 (1.0)
	しゅばん類	1 (4.5)	4 (9.1)	26 (26.8)	7 (18.4)	38 (18.9)	
	帯		3 (6.8)	32 (33.0)	14 (36.8)	49 (24.4)	
	コート			28 (28.9)	6 (15.8)	34 (16.9)	
	はかま			1 (1.0)		1 (0.5)	
	子供もの		4 (9.1)	26 (26.8)	6 (15.8)	36 (17.9)	
夜具・座ぶとん				24 (24.7)	6 (15.8)	30 (14.9)	
合計			34 (154.5)	85 (193.2)	394 (406.2)	136 (357.9)	649 (322.9)

回答数と割合		年代	20代	30代	40代	50代	計
程度			38人(100%)	69人(100%)	104人(100%)	36人(100%)	247人(100%)
洋裁	ふだん着(ブラウス・スカート・ワンピース)	38 (100)	69 (100)	104 (100)	36 (100)	247 (100)	
	スー・コート類(うらつき)	6 (15.8)	8 (11.6)	31 (29.8)	6 (16.7)	51 (20.6)	
	子供服	1 (2.6)	15 (21.7)	7 (6.7)	3 (8.3)	26 (10.5)	
合計			45 (118.4)	92 (133.3)	142 (136.5)	45 (125.0)	324 (131.2)

⑤ 合計が100%をこえるのは複数回答による。

## 5 家庭で製作する和・洋裁

前述したように被服構成のてき得る人の中で実際家庭生活に役立てて製作する人は約87%であり、しない人は約13%であった。その製作しない理由としては多忙が原因であった。したがって被服構成の実現にあたっては、ある程度主婦が時間的余裕をもつ工夫が必要であろう。

次に家庭で製作するものは第5表のとおりであり、和裁と洋裁としては洋裁にウェイトがみられ、現代の社会情勢を表現していると思う。

第5表 家庭で製作する和・洋裁

回答数と割合		年代		20代	30代	40代	50代	計
		種類						
和	ひとえ着	ゆかた		7 (10.8)	23 (24.2%)	22 (57.9)	52 (22.1)	
		ウール		2 (3.1)	15 (15.8)	15 (39.5)	32 (13.6)	
	あわせ長着・羽織				10 (10.5)	10 (26.3)	20 (8.5)	
	じゅはん類			1 (1.5)			1 (0.4)	
	帯				1 (1.1)	1 (2.6)	2 (0.9)	
	子供	おくるみ			1 (1.1)		1 (0.4)	
		子守ばんてん			1 (1.1)		1 (0.4)	
	夜具・座ぶとん			1 (1.5)	9 (9.5)	4 (10.5)	14 (6.0)	
	丹前			2 (3.1)	2 (2.1)		4 (1.7)	
	ねまき類		2 (5.4)	4 (6.2)	2 (2.1)	1 (2.6)	9 (3.8)	
洋	だん着	ブラウス	13 (35.1)	18 (27.7)	43 (45.3)	27 (71.1)	101 (43.0)	
		スカート	26 (70.3)	32 (49.2)	61 (64.2)	24 (63.2)	143 (60.9)	
		ワンピース	25 (67.6)	35 (53.8)	67 (70.5)	27 (71.1)	154 (65.5)	
	スラックス				2 (2.1)	1 (2.6)	3 (1.3)	
	スーツ			6 (9.2)	6 (6.3)	5 (13.2)	17 (7.2)	
	コート			4 (6.2)	7 (7.4)	4 (10.5)	15 (6.4)	
	子供服		6 (16.2)	29 (44.6)	6 (6.3)	1 (2.6)	42 (17.9)	
	小物類		9 (24.3)	13 (20.0)	7 (7.4)		29 (12.3)	
合計		81 (218.9)	154 (236.9)	263 (276.8)	142 (373.7)	640 (272.3)		

④合計が100%をこえるのは複数回答による。

### 和裁の場合

ひとえ長着の「ゆかた」約22%、「ウールもの」約14%、「あわせもの」約9%の順で「じゅはん類」以下7項目については家庭で製作するものが非常に少なくなり、若い世帯ではほとんど製作されていない。また、年配者になるにしたがって製作する種類も割合も多くなり、特に40代がいちじるしい。

### 洋裁の場合

ふたん着程度の「ワンピース」約66%、「スカート」約61%、「ブラウス」43%、「子供服」約18%の順に製作されているが、裏つきの「スーツ・コート類」は約6~7%と低くなっている。また、「子供服」の製作は30代が約45%と高くなっている。

以上の点からみると一般的には和服よりも洋服に、30代では子供服に必要性がみられるようである。また、和服の「あわせ」ものや、洋服の「裏つき」ものの製作率が低いのはむすかしいという点もあるであろうが、一面、生活上の必要度が低いからではなかろうかと思う。

### 6 家庭でする被服構成の利点と必要性

家庭で被服を構成する利点は第6表のように11項目であった。その中で「経済的である」70%と最も多く、ついで「好みのものが自由にできる」、「愛情がこもる」、「体にあう」、「手作りのたのしみ」などの順となっている。これてみると家庭で被服を構成することは家庭経済上大きな利点と言えると思う。

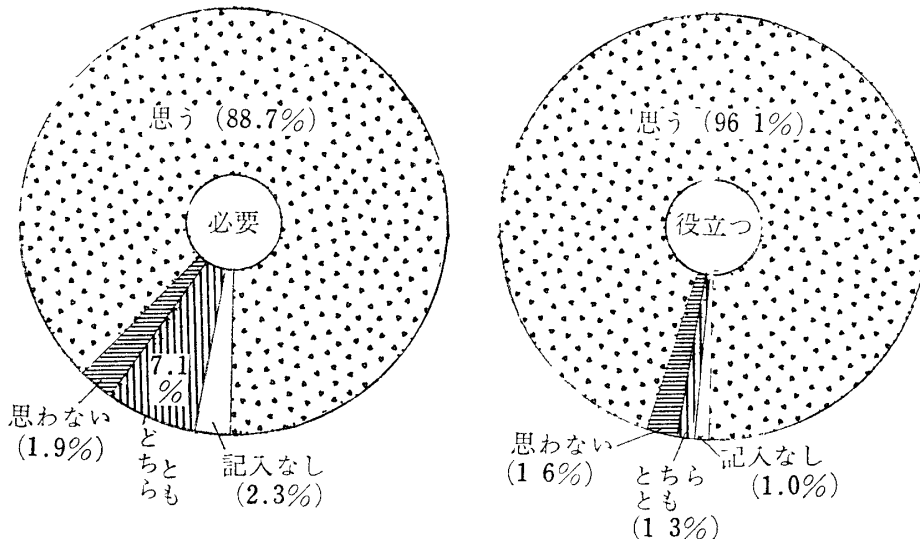
第6表 家庭でする被服構成の利点

利 点	回答数	割 合
		283=100
経 済 的	198人	70.0%
好みのものが自由にできる	50	17.7
愛情がこもる	42	14.8
体 に あ う	37	13.1
手作りのたのしみ	30	10.6
他人かきていない	11	3.9
個性を生かせる	8	2.8
不用品の再生	6	2.1
機能面の考慮	3	1.1
作る時期をえらはず	1	0.4
余暇利用	1	0.4
合 計	387	136.7

④合計が100%をこえるのは複数回答による。

次に被服構成の必要性についてみると第1図のとおりである。

第1図 被服構成の必要性



家庭生活において被服構成が「必要であると思う」人は88.7%、「役立っていると思う」人は96.1%で、「必要と思わない」人は1.9%、「役立つと思わない」人は1.6%と非常に少ない。そして、被服構成が「必要・役立っていると思わない」人は、被服構成の無経験者中のほんの一部であり、被服構成経験者は全員、その必要性を認めているので家庭生活における被服構成の役割が大であることがうかがわれる。

以上の点から手軽に入手できる既製服時代で、庄文服はぜいたくとされている今日では、腕のよい主婦がホームメイドで仕上げれば安価で、しかもぜいたく品として価値を高め、幸せな家庭生活を営むことができるものと考えられる。

#### 7 家庭における被服構成の最低必要範囲

家庭において、被服構成が最低どの程度できればよいかを調べると第7表のとおりである。

第7表 家庭における被服構成の最低必要範囲

回答数と割合 年代	20代	30代	40代	50代	計
最低必要範囲	48人(100%)	84人(100%)	112人(100%)	43人(100%)	287人(100%)
ひとえ長着 { ゆかた ウール	9 (18.8)	30 (35.7)	66 (58.9)	31 (72.1)	136 (47.4)
あわせ長着・羽織	2 (4.2)	2 (2.4)	20 (17.9)	9 (20.9)	33 (11.5)
洋服 { ブラウ ス ワンピース	29 (60.4)	39 (46.4)	59 (52.7)	27 (62.8)	154 (53.7)
子供服	13 (27.1)	22 (26.2)	18 (16.1)	3 (7.0)	56 (19.5)
小物	—	3 (3.6)	1 (0.9)	1 (2.3)	5 (1.7)
つくろいもの	14 (29.2)	22 (26.2)	33 (29.5)	11 (25.6)	80 (27.9)
何でもできる	—	4 (4.8)	—	—	4 (1.4)
合計	67 (139.6)	122(145.2)	197(176.0)	82 (190.7)	468(163.1)

⑤合計が100%をこえるのは複数回答による。

「ふだん着」程度の洋服を自作できることを望む人が約54%、ついで和服の「ひとえもの」を望む人が約47%と多く、年齢が増すにしたがって和服の必要度が高くなっており、20・30代では「子供服」を望む人が意外と多い。これらの点から主婦として自分のものは勿論、家族のものも自作したいと思うのは当然であろうし、また、「子供服」は比較的高価であるが自作すれば簡単で、安価であり、しかも愛情面からも効果が高いと考えられる。

#### IV 総括

以上の結果を総括すると次のようなことがいえると思う。

1 被服構成についてみると被服構成の経験を多くした人は、しない人よりも、また、年配者が若い人よりもすぐれていることから、被服構成の経験をつむことが必要であろうと思われる。

2 主婦の約89%が被服構成経験者であるが、その多くは正規の学校教育、各種学校、個人指導などで習得しており、なかでも学校教育の影響が大きいようである。

3 被服構成経験者のうち、家庭で被服を製作する人は約87%とかなり高く、手作りの評価が

高いことがうかがわれる。また、実生活において被服を製作しなくとも、経験を通して知識を豊富にすることは多様化された被服生活の現状では、その選択や購入のみならず、ひいては家庭生活の安定・向上に役立つものと思う。

4 主婦の多くが自作の良さは経済的であり、ふたん着程度は自作できることをのそんている。手軽に入手できる便利な既製服時代に注文服はぜいたくとされている今日では、腕のよい主婦が家庭で製作すれば、経済的であることは勿論、豊かに、しかも愛情に満ちた幸せな家庭生活を営むことができるものと考えられる。

5、家庭における被服構成の実現を計るためには多忙が原因で被服構成できないと言う人や、またある程度時間的ゆとりがある年配者に被服構成率が高いことから察して、主婦に時間的余裕をもつ工夫をすることが必要かと思う。

6 家庭生活における被服構成の範囲は主に、和裁では「ひとえ長着」、洋裁では簡単に製作できる「ブラウス」・「スカート」・「ワンピース」程度であるが、この必要性を満たすためにも、被服構成の技術向上を計るべきであろう。

(本研究は、1974年12月、日本家政学会関東支部において発表したものである)

#### 参考文献

- 梶山藤子外 被服構成(上・下) (広川書店)  
高橋春子、今井和子他 被服構成学(建帛社)  
荒井純子、大江チエ、樋口えみ、井上民子、谷島久以 東京家政大学研究紀要第15集(1975)  
伊藤花子 衣生活(1975 9)  
清水房、石渡すみ江、大山サカエ 家政学雑誌 第26巻 第6号(1975)